

「火山がつくる地形(10)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

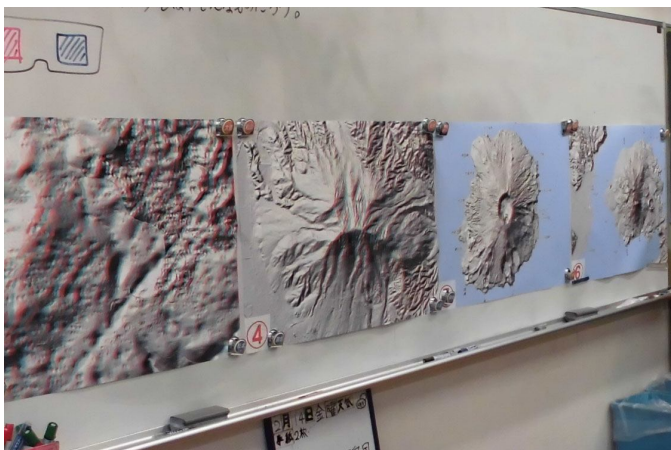
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

小さなアナグリフ画像を取り囲んで、一部の子どもが画像を反対側から観察して、正しい立体視像を見られない問題---これを解決するには、拡大した画像を壁面に掲示して、同時に観察するのが一番良い。



幸い本校のコンピュータ・ルームには大型のカラープリンタがあり、画像をA1サイズ(模造紙よりも少し小さいサイズ)に印刷できる。大型のインクタンクを備えた、インクジェットプリンタであるが、印刷にかかる時間は一枚数分である。



この方法で、いくつかの山のアナグリフ画像を、教室のホワイトボードに掲示してみた。アナグリフ画像は、視点を遠くするほど---つまり画像から離れたほうが立体感が強調される。試しにこの状態で専用メガネをかけて2メートルほど離れて観察してみると、山頂部が30cmほども飛び出して見えた。細かい地形や浸食谷の様子も非常によくわかる。



子どもたちは左側画像のそばに寄って、立体的な地形を観察していた。立体感が感じられるのは「視覚」だけで、子どもたちもそのことは理解しているのだが、つい画像を触りたくなってしまう。



その後、各地形の画像の前は大いに賑わっていた。火山の特徴的な地形や、「なぜこの地形から火山であるとわかるのか」といった課題について、話し合いながら観察していた。



この「大画面、壁面掲示」の方法では、すべての子どもが正しい向きで観察できる。つまり、同じ火山を見ながら論議している子どもが、「同じ立体感」で正しく観察できることがわかった。